第118回　日文研フォーラム

■

内藤湖南先生の真蹟

ー高麗太祖顯陵詩についてー

Naito Konan's Handwriting - His Poem Exalting the Tomb of King Taejo, the Founder of the Koryo Dynasty

■

金　知見

KIM Ji Kyun

国際日本文化研究センター

日文研フォーラムは、国際日本文化研究センターの創設にあたり、一九八七年に開設された事業の一つであります。その主な目的は海外の日本研究者と日本の研究者との交流を促進することにあります。

研究という人間の営みは、フォーマルな活動のみで成り立っているわけではなく、たまたま顔を出した会や、お茶を飲みながらの議論や情報交換などが貴重な契機になることがしばしばあります。このフォーラムはそのような契機を生み出すことを願い、様々な研究者が自由なテーマで話が出来るように、文字どおりインフォーマルな「広場」を提供しようとするものです。

このフォーラムの報告書の公刊を機として、皆様の日文研フォーラムへのご理解が深まりますことを祈念いたしております。

国際日本文化研究センター

所長　河合　隼雄

● テーマ ●

内藤湖南先生の真蹟
ー高麗太祖顯陵詩についてー

Naito Konan's Handwriting - His Poem Exalting the Tomb of King Taejo, the Founder of the Koryo Dynasty

● 発表者 ●

金　知見
KIM Ji Kyun

韓国仏教教育大学大学院長
Dean of Graduate School, Korean Buddhist Educational College
国際日本文化研究センター客員教授
Visiting Professor, Int'l Research Center for Japanese Studies

1999年5月11日（火）

発表者紹介

金　知見
KIM Ji Kyun
韓国仏教教育大学大学院長
Dean of Graduate School, Korean Buddhist Educational College
国際日本文化研究センター客員教授
Visiting Professor, Int'l Research Center for Japanese Studies

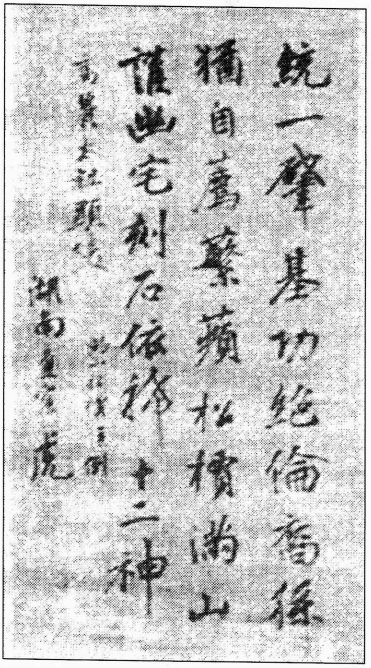
1960年3月　東国大学校仏教学科卒業
1963年2月　東国大学校大学院哲学碩士学位取得
1971年3月　日本東京大学大学院印度哲学研究科博士課程（華厳学専攻）満期修了
1973年3月　東京大学大学院にて『新羅華厳思想の研究』論文による文学博士学位取得
1976年9月～現在　大韓伝統仏教研究院院長
1983年5月～現在　日本印度学仏教学会理事
1988年1月～1989年3月　江原大学校人文科学研究所所長
1989年4月～1997年2月　韓国精神文化研究院教授
1990年8月～現在　仏教教育大学大学院長
1994年4月～1995年3月　日本東京大学文学部客員教授
1997年2月　韓国精神文化研究院教授停年退職
1997年3月　日本東方学術賞受賞
1999年2月　国際日本文化研究センター客員教授

主な著書・論文

『華厳論節要　全3巻（知訥　撰）』(編著)、日本　東京:東京大学文学部　1968
『均如大師華厳学全書（上.中.下）』、日本:後楽出版株式会社　1977
『祖堂集と論集』、ソウル:凡進出版社　1988
『プラサンナパタ』全4冊（編著)、ソウル:東邦社　1988
『元暁師の哲学世界』(編著)、ソウル:民族社　1989
『六祖壇経の世界』(編著)、ソウル:民族社　1989
『四山碑銘集註のための研究』、韓国精神文化研究院　1994
『法界図圓通記』(編著)、韓国精神文化研究院　1995
「新羅華厳の系譜と思想」、韓国『学術院』12輯－人文社会、大韓民国学術院　1973, 31－65面
「新羅華厳学の主流考」、『崇山　朴吉真博士華甲紀念－韓国仏教思想史－』圓仏教思想研究　1975, 257－75面
「雪岑の華厳と禅の世界」、『金岡秀友博士回甲論文集』、日本:東洋大学、1988, 479－502面
「新羅義相法諱考－与海東華厳的歴運相聯－」、『季羨林博士八旬論集』、中国:北京大学、1991
「一然撰　重編曹洞五位序」、日本語訳註　松ケ岡文庫研究年報　第9号、1995, 123－44面

内藤湖南先生の厖大なる全集十四巻（筑摩書房刊）には収録されていない真蹟が、韓国の延世大学校の名誉教授、西餘閔泳珪博士（八十七歳）の珍蔵により、韓国の地に伝存されている機縁があった。七言四句の漢詩である。すなわち、左記の漢詩である。

統一肇基功絶倫
裔孫猶自薦繁蘋
松檟滿山護幽宅
刻石依稀十二神
　　滿山松檟誤倒
高麗太祖顯陵
　　湖南査客　虎　□



右真蹟の漢詩を和訳してみることにする。詩義不会からくる言葉の足りぬのは致し方がない。

訳一

天下一統の基礎を築きあげた
太祖の功(いさお)は絶倫だ。
遠孫湖南は今、粗末な供養の誠を捧げる
もりあげられた山いっぱいの若い松と櫃(ひさぎ)は、
しっかりと陵墓を守ってござる。
石に刻した十二神將が在りし日の
幕僚そっくりだ。
　満山と松櫃を誤って倒置した。
高麗太祖顯陵を詠う。
　湖南査客　虎　□

訳二

（高麗の太祖は）国を統一し、（平安なる）治世の基(もと)いを固められた。その功績は比類ないものである。
（それゆえ）子孫たちは、なお自ら供物を（その陵墓に）捧げるのである。

松や櫌（ひさぎ）は（その陵墓のある）山に満ち、（太祖の）死後の住まいを護っている。
太祖を守護する十二神がかすかに浮かんでいる。
満山と松櫌を誤って倒置した。
高麗太祖の顯陵を詠う。
湖南査客　虎（次郎）　□

顯陵詩の作詩年代は記録されていない。しかし関係のあろうと思われる、二通のハガキ内容（『内藤湖南全集』筑摩書房　一九六九年～一九七六年刊に収録されている）から明治三十九年（一九〇六）湖南四十一歳の作であろうと思われる。すなわち、同年八月十七日、韓国の平壌臨江ホテルにて、大阪東区内淡路町二丁目三番地、内藤郁子宛のハガキと、八月二十六日「関野君の見のこし物」を紹介しよう。

(1)　郁子夫人宛のハガキ、「昨十六日京城出發開城にて一泊高麗の舊都を觀今十七日當地着明日は滞在明後日出發の豫定にて同日は清國の安東縣に着可申候奉天着は廿一日になるべく候……。

(2)　関野君の見のこし物、八月二十六日奉天総領事館内より、京都市室町中立

賣上ル富岡謙三宛、高麗太祖顯陵十二支神象の一、海東金石苑所載新羅角干の墓と比較すべし寫眞も取て置き申候」。という絵ハガキは湖南先生の自筆である。その絵ハガキの絵は「海東金石苑」（観古閣叢刻第十五輯）の第九番目の申（さる）象とよく似ている。右二つのハガキの内容から湖南先生の四十一歳の際、高麗太祖の顯陵を巡礼した時の漢詩であろうと推察されるのである（ハガキは全集十四巻の四二一頁と四二二頁）。右の漢詩を書き終えて後に「満山松檟誤倒」と六字の夾註されたことは、修正された方が漢詩作法に如何に洗練されたかを、または湖南先生の詩眼の世界を垣間見ることができる。勿論湖南先生は十三歳の時漢詩をつくり、十六歳の時には、明治天皇東北御巡幸を歓迎する「奉賀聖駕東巡」の詩を残されている。漢文を読み漢詩をつくる訓練は、近代学校制度が生まれるまでは東洋人の教養の基本であったことは周知のことである。

湖南先生の全集十四巻の「寶左盦文」「玉石雑陳」「湖南文存」は漢文である。鵜呑みであるが座右に置き折に触れて読み返してみては緊張せずにはいられない。「内藤史学は、エッフェル塔のように、それ自身のがっちりした骨組みで大空を凌いで立っている（宮崎市定）」といわれた通りである。その骨組みは他ならぬ漢学であったと私はおもうのである。しかし湖南先生の学域は固より広大で、漢文、漢詩はその一部に過ぎないのは言うまでもないことである。蛇足承知で新出語句に解説を加えることにする。

高麗（九一八―一三九二）は三十四代継承した王国である。史書に高句麗（三七BC―六六八AD）は韓国の古代三国中の一であるにも拘らずコーマというふりがなで高麗と混同する例をみるが修正区別すべきである。

一方高麗を建国した王建（八七七―九四三）は在位九一八―九四三年間である。太祖とは廟号、顯陵は陵号、諡号は神聖という。顯陵の所在地は、松都開域市中西面鵠嶺里、神恵王后と合附（一緒にほうむる）。

蘩蘋、はそまつな供物、祭需のこと。

新羅角干墓、新羅角干（伊伐淦・舒発翰）は新羅十七官等の首位、金庾信将軍は百済を合併後に大角干、更に高句麗を合併してから太角干に昇進するように

なり、角干の上に二個の官等が更に加わることとなる（三国史記雑志第七職官）。角干墓は「海東金石苑」清劉喜海撰、観古閣叢刻第十五輯とその影印本（亜細亜文化社刊）により金庾信将軍墓と思われる。

内藤（一八六六―一九三四）先生の名は虎次郎、字は炳郷、号を湖南とされた。先生の虎次郎という名は生まれ年が丙寅でひのえとらからつけられたといわれることもあったが、実はそうでないようである。月報12号によると、先生の誕生に当たり、父君調一翁の「松陰吉田寅次郎の人となりを崇拝するあまり、寅次郎と命名した」との手記を思い出した（高橋克三氏）。同じ月報に、「父の思い出」という題で、山元祥子（さがこ）氏の文章を読み、成程先生は先見の明があったと思われることがあった。祥子氏は子宝に恵まれた先生の四男四女の末子であられる。先生の還暦パーティのとき、五歳であって、現在は唯一人の御令女である。すなわち、次のような内容である。

…しかしこの楽しい庭の散歩の時に言った父の言葉で、私が今日まで誰にも話さなかったことがある。いくら冗談とはいえ、あまり傲慢なようで気がひけるの

だ。けれども又これは如何にも自負心の強い父の一面を表しているようで省くわけにはいかない。父はこう言った。「何時かこの蔵（書庫）に人々はお灯明をあげて学問が上達するようにとおがむだろう」（一九七二・九・二八）。

「お灯明をあげて学問が上達するようにとおがむだろう」という宣言は形は変わったが、現代のお灯明のように思われる出来事があった。それは一九九九年六月三十日付けの産経新聞の記事であり、これを読み心からの拍手を送った。

「内藤湖南の文庫目録関西大ＣＤ－ＲＯＭ化」という見出しで、「東洋史大家の業績に光当てる」、ということである。記事によると、

関西大学総合図書館（大阪府吹田市）は二十九日までに、東洋史学の大家、内藤湖南（一八六六―一九三四年）が収集した書籍からなる「内藤文庫」の目録をＣＤ－ＲＯＭ化した。国宝級の中国の古書を中心に計四千二百五十七点を紹介、うち二十六点はフルカラーで画像化した。七百部を製作、他大学の人文系学部や公共図書館などに配布、研究に役立ててもらう。バブル後の混迷の時代にあって、実証的で自由な湖南の学風に、再び光を当てる機会ともなりそうだ。

湖南は秋田県出身。秋田師範を卒業後、大阪朝日新聞などの記者を経て明治四十年に四十二歳で京大講師となった。歴史を教訓的、倫理的に見るのではなく、事実として実証的に研究する東洋史学を確立した。主著に「日本文化史研究」「先哲の学問」がある。

「先生の業績は東洋学の専門家の独占にゆだねべきものではなく、政治、思想、芸術など文化のあらゆる領域において独創と努力の尊さを知る人のこぞって読むべき国民的遺産」(故桑原武夫氏)

その縦横無尽の学風を高く評価、影響を受けた学者は数知れない。

関西大では昭和五十八年、湖南の蔵書約三万冊と、湖南が晩年を過ごした京都府加茂町の「恭仁(くに)山荘」を、内藤家から譲り受けた。蔵書の中には、中国・清代の考証学者、章学誠の史論「文史通義」の稿本(手書き本)や江戸時代のサンスクリット学者、慈雲による経典翻訳書「梵学津梁」の自筆稿本など、学術的に極めて価値の高い書籍をはじめ、親交のあった森鷗外が、全文手書きして湖南に贈った江戸時代の書誌学者、渋江抽斎の『懲語(えいご)』など珍本もある。

図書館で整理、目録を作成するとともに、学内の学生、教員だけでなく学外の研究者に閲覧を認め「内藤文庫」の名は広く知られることとなった。

今回、CD－ROMに収録されたのは漢籍三千七百六点、国書三百十三点、そのほか外国書二百三十八点の計四千二百五十七点（二万千四百三十冊）で、文庫の三分の二に上る。

文庫資料の中には、湖南の蔵書印や自筆の書き入れが見られる。これらは湖南の学問を知るうえで貴重な情報源で、どんな書き入れをしているか調べることができるよう「湖南書入」というキーワードで検索できるようにしたのが特徴。漢籍の目録をCD－ROM化したのは本邦初。一般に使用されない漢字をデータ化するのに手間がかかり、製作に約三年を要したという。

布川香織・学術資料課主事は「これまで内藤文庫とは縁のなかった人にも、興味を持ってもらうきっかけとなれば」と話している。

産経新聞の内容は以上の通りである。すなわち、湖南先生は、関西大学のCD－ROMによって復活されたのである。それは現代科学技術による、灯明の行列に外ならぬ出来事なのだ。しかしその内藤文庫にも、高麗太祖の顯陵詩は収録されていないという。

私が最初、湖南先生のご尊名を拝したのは、大正十年三月、京都帝国大学教授内藤虎次郎博士の手によって写真複製され『景印正徳本、三国遺事』（コロタイプ版）として発刊された本がご縁であった。それは故趙明基教授の個人所蔵品で、誰にも秘密で珍蔵されておられることと、絶対誰にも見せてはならないという注意を受けてからの借覧であった。まるで秘密でも漏らされるように、内藤先生は国学者爲堂鄭寅譜先生、六堂崔南善先生も、高く評価する人物であるということを教えて下さった。あのときの思い出はいまも生々しい。

そのきっかけとなったのは、たしか坪井九馬三博士刊行の『三国遺事』に、避諱（ひき）の問題である重要な個所を缺点として暴きだしたことについて疑問をもち質問したところ、削除しない方もおると言われた。それではその方は誰ですかとしつこくねだりつき、趙先生の自宅にご一緒して頂き拝覧させて頂いた。褐色の風呂敷で包蔵されていた。先ず目についたのは、湖南先生の『三国遺事』の漢文でなる序文であった。七百字程の短い文章であった。しかしあの問題の避諱の個所は生かされていた。筆写したい希望を申し上げたところ、先生は勉強するがよいと渡して下さった。あのときから『三国遺事』の一字一句が新しい興味を呼びおこしてくれた。師の恩の尊いことが心の内に知らされる。

当時は、史学界で避諱が問題にされなかった時期である。すなわち、葛城末治の金石文の避諱と缺筆（朝鮮金石攷一九三五年）と陳新会の『史諱挙例』（文史哲出版社一九八七年）が学会に問題を投げかけたことからも分かるように、湖南先生の判断と史観は先駆的であったと思われる。

避諱は中国の周（前一一三四―二五〇）から始まり「秦」から「宋」にかけた期間に盛行したが「元」代には施行されることがなかった。その後「明」代の泰昌（一六二〇）以後更に厳しく実施された。文章の叙述において致しかたなく当代または先代の君主及び尊貴者の名前と同一の文字または同一音の字に該当する字が避けられない場合、その内容を避ける方法であった。その避諱法は韓国の古代に自生的な制度ではなくて、中国の風習が輸入されたものであった。したがって韓国で独自的に施行されたというよりは、中国との間に政治的状況と一致して施行され、また消滅された。その結果統一新羅の初期から高麗末期の時期にまで、国内の諸王との避諱よりも、中国歴代王朝が施行した避諱法の影響を受けている。故に避諱法は当時国内の政治状況とこれによる中国との外交的な関係等を明す場合における補助資料的側面もある。故に避諱法は歴史上の人物名称に関して、異字の表記例がある。先ず留意すべきことは避諱の問題である、帝王または尊長の

名前に使用された文字との抵触である。これを無視しては変改以前の人名、官名、地名、書名、年号等の識別ができない。これは古代韓国と中国の間に不可欠なる問題であったことである。

日本の古雅なる京の都で、湖南先生の遺業について先生の全書を拝覧する機会に恵まれたことは私にとっては実に幸運である。まるで雲の上の存在であった湖南先生の体臭を感じる思いである。私が先生のことを学行一致の実践家であったと仰ぎみるのは、特に一九一一年の辛亥革命の時中国から日本に亡命する文化人は湖南先生を頼り、京都にやって来るが、その数多い中国人のなかで王国維（一八七七―一九二七）のことからである。王国維の名著『宋元戯曲考』は先生のご厚情によるものといわれる。その王国維が本国に帰り、一九二七年旧暦五月二日「五十の年、ただ一死を欠くのみ。この世変を経て、義として再び辱しめらるること無し」という遺書を残し、頤和園の昆明湖に身を投じるという衝撃的な最期を遂げた。汨羅に身を投じて死んだ屈原（前三四三―前二七七）、楚辞の代表的作家で「離騒」・「漁父」などをつくり、のちの文学に大きな影響を与えた人を想起させる。この消息が京都に伝わり、湖南先生は、五条坡袋中庵にて王静安（王国維の号）先生の追悼会を開く。参加者は狩野直喜　鈴木虎雄　神田喜一郎等の諸

氏であったという。実に東洋の君子之交の文化人たちならではの法会であったことと思われる。王国維の死後、少なからざる噂が流れた、そのとき狩野直喜は次の如く言われたという。「若し国史の本伝に上ぼすとせば正しく儒林、忠義の雨伝に加ふるべき人である」と。実に東洋のためにも文化のためにも残念なことであったと思われる。当時は現在のように日中友好とかいう時代ではなかった。暴支膺懲の嵐のなかで暗く長い日中戦争の間にも湖南先生の君子之交は守りぬかれた。京の都の文化人達の高い文化水準に頭がさがる。湖南先生には王国維の死が他国の他人の死ではなかっただろうと思われる。義を生命よりも重んじる中国の文化人達が湖南先生を頼り日本国にやって来たのは、他ならぬ湖南先生の人格を深く信じたことからであったと私は思う。

私が日文研のお世話になることが確定した去年の暮である。西餘先生を座長に仰ぎ、教授、弁護士、言論人等少数のメンバーが月三回の学習会をしていたが、この日は送別会ということで全員が集まった。何時もの通り西餘先生の自宅と距離がほど近いソウル麻布区の第一ホテルの喫茶店であった。皆が着席すると西餘先生は稀にみる喜色満面でのお姿で、お芽出度う、日文研は京都でしたね、記念にこれを持って行きなさいと、渡して下さったのが湖南先生の真蹟高麗太祖の顯

陵詩の掛け軸であった。その質感が明るい電灯に照明を受けて輝きいまにも毛筆の墨が匂ってきそうなほどに生々しかった。湖南先生の落款がまぶしい程鮮明であった、珍蔵された西餘先生の所蔵者印、行半山人印が捺してある、縦四二センチ―横二十二センチの小品であった。

所蔵者行半山人という自号は、先生の謙遜深い人格の表現だと思われる。しかし西餘先生は、延世大学校文科大学長、同大図書館長、韓国図書館協会々長、同大東方研究所々長、同大国学研究院々長を歴任、大韓民国学術院会員、特に最近八十老令にも拘らず、盛唐の詩仙といわる李伯（七〇一―七六二）の詩題で有名な蜀道難の険難の道路を三度も巡礼して確認された、『四川講堂』という著述は名著といわれる。李商隠（八一三―八五八）の四証堂碑と、新羅無相の静衆寺趾等の確認は初期禅宗史の研究に欠かせぬ力作であるといわれる。「宝林伝」（偽書）を金科玉条として信じていた南岳―馬祖に継がれる系譜は北宋以後の記録に依るのに対して、智詵―處寂―無相―馬祖―西堂―道義の系譜は四証堂碑等唐代の記録に土台を置くことを、文献と遺蹟を通じて確認したのは四川省探査チームの蜀道長征による成果であった。

国破山河の荒城、高麗の旧都にて高麗太祖の顯陵の詩を詠う湖南先生の心境は、

湖南先生以外の人は知るすべはないであろうが、私にはその詩の餘韻が荒城に春の空気のように温かい気持ちを誘い掛けてくる感じがする。湖南先生のことを山脈とかエッフェル塔などになぞらえる。もっともなことであるが私には富士山頂のような存在であられたと思われる。町の流行歌の一節に、「富士のたかねに降る雪も、京都ポント町に降る雪も、雪に変わりはないけれど、とけて流れば皆同じ」と。しかし富士のたかねの雪はとけて流れることなしに、一年中とけないことから、いわく萬年雪という。萬年雪を踏みご来光を拝む心境の経験のない方には想像もできないくらいすがすがしい、神秘の世界そのものであった。私は一九六五年七月二十八日、日本国土最高地点富士頂上にて、ご来光を拝み拙作の漢詩を得たことがあった。漢詩の形式をぬきにした写生的なものである。

噴火口呑萬年雪
脚下滄溟劫外寒
雲自捲舒近河漢
扶桑独露第一峰

噴火口　萬年雪を飲みこみ
脚下の海原　月光のごとく冷たく
雲は自ら捲きひらき　天川近し
扶桑に独露　第一峰なり。

富士山は縁起が良いといわれる。すなわち、標高をいうとき「ミナナロ」（皆成ろ）という。三千七百七十六メートルのことである。誰れかさまの富士山ではなく、みんなの富士山であるからである。大変僭越と思いながらも湖南先生を富士山になぞらえるのは、適当なくらべようがないから日本一の山を思い出したまである。

明治・大正・昭和の時代のことは戦争が中心的になりがちである。しかし明治・大正・昭和の苦しい長い間を「君子之交」の実践に生きぬいた湖南先生のことは流行歌手にも及ばず、話題になることが稀であったが幸甚にも関西大学総合図書館で湖南先生の文庫目録をCD－ROM化したことによって光が当たることになった。日文研ではいろいろな共同研究・個人研究が成果をおさめている。実に「友ありて遠方より来たりたのしからずや」の理想が実践されている。そのなかに湖

南先生の広くて深い業績についても共同研究の課題になりうると思うのである。それは日本人のアイデンティティーにつながることと思う。

湖南先生の真蹟高麗太祖の顯陵詩についてご紹介させて頂いた。不慣れな日本語で失礼を重ねた。

最後になりましたが、国際交流基金の京都支部講堂にて講演の際、湖南先生のご令女祥子女史に出会い、その後日、湖南先生の御孫子内藤泰二様の日文研訪問を受けたこと等深いご縁に感謝している。

＊＊＊発表を終えて＊＊＊

「海東華厳思想史」のまとめをしばらく棚上げして　内藤湖南先生の真蹟「高麗太祖の顯陵詩」を読ませて頂き、私にとっては幸運であった。特に日本の古雅なる京都は湖南先生の縁の地であり、京都市民向けの発表に意義を感じた。

自然と人工が調和をなしている日文研のコモンルームに、世界の友人がよりそって和気藹々として語り合うさまは、世に稀にみる風景で、まさに「友ありて遠方より来たりたのしからずや」の東洋人の理想のモデルである。

終わりになりましたが、コメンテーターの頼富本宏教授と日文研スタッフの皆様のご配慮に感謝する。

金　知見

日文研フォーラム開催一覧

回	年月日	発表者・テーマ
1	62.10.12 (1987)	アレッサンドロ・バロータ（ピサ大学助教授） Alessandro VALOTA 「近代日本の社会移動に関する一、二の考察」
2	62.12.11 (1987)	エンゲルベルト・ヨリッセン（日文研客員助教授） Engelbert JORIβEN 「南蛮時代の文書の成立と南蛮学の発展」
③	63. 2.19 (1988)	リー A. トンプソン（大阪大学助手） Lee A. THOMPSON 「大相撲の近代化」
4	63. 4.19 (1988)	フォスコ・マライーニ（日文研客員教授） Fosco MARAINI 「庭園に見る東西文明のちがい」
⑤	63. 6.14 (1988)	宋　彙七（慶北大学校師範大学副教授） SONG Whi Chil 「大塩平八郎研究の問題点」
6	63. 8. 9 (1988)	セップ・リンハルト（ウィーン大学教授） Sepp LINHART 「近世後期日本の遊び－拳を中心に－」
⑦	63.10.11 (1988)	スーザン J. ネイピア（テキサス大学助教授） Susan NAPIER 「近代日本小説における女性像－現実と幻想－」
⑧	63.12.13 (1988)	ジェームズ C. ドビンズ（オベリン大学助教授） James C. DOBBINS 「仏教に生きた中世の女性－恵信尼の書簡－」

⑨	元. 2.14 (1989)	厳　安生（北京外国語学院日本語学部助教授） YAN An Sheng 「中国人留学生の見た明治日本」
⑩	元. 4.11 (1989)	劉　敬文（遼寧大学日本研究所副所長） LIU Jingwen 「教育投資と日本の戦後経済高度成長」
⑪	元. 5. 9 (1989)	シュザンヌ・ゲイ（オベリン大学助教授） Suzanne GAY 「中世京都における土倉酒屋－都市社会の自由とその限界－」
⑫	元. 6.13 (1989)	夏　剛（京都工芸繊維大学助教授） HSIA Gang 「インタビュー・ノンフィクションの可能性－猪瀬直樹著『日本凡人伝』を手掛りに－」
⑬	元. 7.11 (1989)	エルンスト・ロコバント（東洋大学助教授） Ernst LOKOWANDT 「国家神道を考える」
⑭	元. 8. 8 (1989)	キム・レーホ（ソ連科学アカデミー・世界文学研究所教授） KIM Rekho 「近代日本文学研究の問題点」
⑮	元. 9.12 (1989)	ハルトムートO.ローターモンド （フランス国立高等研究院教授） Hartmut O. ROTERMUND 「江戸末期における疱瘡神と疱瘡絵の諸問題」
⑯	元.10. 3 (1989)	汪　向榮 （中国中日関係史研究会常務理事・日文研客員教授） WANG Xiang-rong 「弥生時期日本に来た中国人」
⑰	元.11.14 (1989)	ジェフリー・ブロードベント（ミネソタ大学助教授） Jeffrey BROADBENT 「地域開発政策決定過程を通してみた日米社会構造の比較」

⑱	元.12.12 (1989)	エリック・セズレ（フランス国立科学研究所助教授） Eric SEIZELET 「日本の国際化の展望と外国人労働者問題」
⑲	2．1．9 (1990)	スミエ・ジョーンズ（インディアナ大学準教授） Sumie JONES 「レトリックとしての江戸」
⑳	2．2.13 (1990)	カール・ベッカー（筑波大学哲学思想学系外国人教師） Carl BECKER 「往生－日本の来生観と尊厳死の倫理」
㉑	2．4.10 (1990)	グラント K．グッドマン （カンザス大学教授・日文研客員教授） Grant K. GOODMAN 「忘れられた兵士－戦争中の日本に於けるインド留学生」
22	2．5．8 (1990)	イアン・ヒデオ・リービ （スタンフォード大学準教授・日文研客員助教授） Ian Hideo LEVY 「柿本人麿と日本文学における『独創性』について」
23	2．6.12 (1990)	リヴィア・モネ（ミネソタ州立大学助教授） Livia MONNET 「村上春樹：神話の解体」
㉔	2．7.10 (1990)	李　国棟（北京連合大学外国語師範学院日本語学部講師） LI Guodong 「魯迅の悲劇と漱石の悲劇－文化伝統からの一考察－」
㉕	2．9.11 (1990)	馬　興国（遼寧大学日本研究所副所長・日文研客員助教授） MA Xing-guo 「正月の風俗－中国と日本」
㉖	2.10．9 (1990)	ケネス・クラフト（リハイ大学助教授） Kenneth KRAFT 「現代日本における仏教と社会活動」

27	2.11.13 (1990)	アハマド M. ファトヒ（カイロ大学講師） Ahmed M. FATTHY 「義経文学とエジプトのベーバルス王伝説における主従関係の比較」
㉘	3. 1. 8 (1991)	カレル・フィアラ （カレル大学日本学科長・日文研客員助教授） Karel FIALA 「言語学からみた『平家物語・巻一』の成立過程」
㉙	3. 2.12 (1991)	アレクサンドル A. ドーリン （ソ連科学アカデミー東洋学研究所上級研究員） Aleksandr A. DOLIN 「ソビエットの日本文学翻訳事情－古典から近代まで－」
30	3. 3. 5 (1991)	ウイーベ P. カウテルト（ワーゲニンゲン大学研究員） Wybe P. KUITERT 「バロック・ヨーロッパの日本庭園情報 －ゲオルグ・マイステルの旅－」
㉛	3. 4. 9 (1991)	ミコワイ・メラノビッチ （ワルシャワ大学教授・日文研客員教授） Mikołaj MELANOWICZ 「ポーランドにおける谷崎潤一郎文学」
32	3. 5.14 (1991)	ベアトリス M. ボダルト・ベイリー（オーストラリア国立大学リサーチフェロー・日文研客員助教授） Beatrice M. BODART-BAILEY 「三百年前の京都－ケンペルの上洛記録」
㉝	3. 6.11 (1991)	サトヤ B. ワルマ （ジャワハルラール・ネール大学教授・日文研客員教授） Satya. B. VERMA 「インドにおける俳句」
34	3. 7. 9 (1991)	ユルゲン・ベルント（フンボルト大学教授・日文研客員教授） Jürgen BERNDT 「ドイツ統合とベルリンにおける森鷗外記念館」

㉟	3．9.10 (1991)	ドナルド M. シーキンス（琉球大学助教授） Donald M. SEEKINS 「忘れられたアジアの片隅－50年間の日本とビルマの関係」
㊱	3.10. 8 (1991)	王　暁平（天津師範大学助教授・日文研客員助教授） WANG Xiao Ping 「中国詩歌における日本人のイメージ」
㊲	3.11.12 (1991)	辛　容泰（東国大学校文科大学教授・日文研来訪研究員） SHIN Yong-tae 「日本語の起源 －日本語・韓国語・甲骨文字との脈絡を探る－」
㊳	3.12.10 (1991)	洪　潤植（東国大学校教授） HONG Yoon Sik 「古代日本佛教における韓国佛教の役割」
㊴	4．1.14 (1992)	サウィトリ・ウィシュワナタン （デリー大学教授・日文研客員教授） Savitri VISHWANATHAN 「インドは日本から遠い国か？－第二次大戦後の 国際情勢と日本のインド観の変遷－」
40	4．3.10 (1992)	ジャン＝ジャック・オリガス （フランス国立東洋言語文化研究所教授） Jean-Jacques ORIGAS 「正岡子規と明治の随筆」
㊶	4．4.14 (1992)	リブシェ・ボハーチコヴァー（プラハ国立博物館日本美術元キュレーター・日文研客員教授） Libuše BOHÁČKOVÁ 「チェコスロバキアにおける日本美術」
42	4．5.12 (1992)	ポール・マッカーシー（駿河台大学教授） Paul McCARTHY 「谷崎文学の『読み』と翻訳：アメリカにおける 最近の傾向」

43	4．6．9 (1992)	G. カメロン・ハーストⅢ（ニューヨーク市立大学リーマン広島校学長・カンザス大学東アジア研究所長） G. Cameron HURST Ⅲ 「兵法から武芸へ－徳川時代における武芸の発達－」
44	4．7.14 (1992)	杉本　良夫（オーストラリア・ラトローブ大学教授） Yoshio SUGIMOTO 「オーストラリアから見た日本社会」
㊺	4．9．8 (1992)	王　　勇（杭州大学日本文化研究センター教授・日文研客員助教授） WANG Yong 「中国における聖徳太子」
㊻	4.10.13 (1992)	李　栄九（大韓民国中央大学教授・日文研客員教授） LEE Young Gu 「直観と芭蕉の俳句」
㊼	4.11.10 (1992)	ウィリアム D. ジョンストン （米国・ウェスリアン大学助教授・日文研客員助教授） William D. JOHNSTON 「日本疾病史考 －『黴毒』の医学的・文化的概念の形成」
㊽	4.12．8 (1992)	マノジュ　L．シュレスタ（甲南大学経営学部講師） Manoj L. SHRESTHA 「アジアにおける日系企業の戦略転換 －技術移転をめぐって－」
㊾	5．1.12 (1993)	朴　正義 （圓光大学校師範大学副教授・日文研来訪研究員） PARK Jung-Wei 「キリスト教受容における日韓比較」
50	5．2．9 (1993)	マーティン・コルカット （米国・プリンストン大学教授・日文研客員教授） Martin COLLCUTT 「伝説と歴史の間－北條政子と宗教」

㊿	5．3．9 (1993)	清水　義明（米国・プリンストン大学マーカンド栄誉教授） Yoshiaki SHIMIZU 「チャールズ L. フリアー (1854〜1919) とフリアー美術館 －米国の日本美術コレクションの一例として－」
52	5．4.13 (1993)	金　春美（高麗大学教授・日文研来訪研究員） KIM Choon Mie 「日本近代知識人の思想と実践－有島武郎の場合－」
53	5．5．11 (1993)	タキエ・スギヤマ・リブラ（ハワイ大学教授） Takie SUGIYAMA LEBRA 「皇太子妃選択の象徴性 －旧身分文化との関連を中心として－」
54	5．6．8 (1993)	姜　希雄（ハワイ大学教授・日文研客員教授） H.W.KANG 「変革と選択：10世紀の日本と朝鮮 －科挙制度をめぐって－」
55	5．7.13 (1993)	ツベタナ・クリステワ （ソフィア大学教授・日文研客員教授） Tzvetana KRISTEVA 「涙の語り － 平安朝文学の特質－」
56	5．9.14 (1993)	金　容雲 （漢陽大学教授・日文研客員教授） KIM Yong-Woon 「和算と韓算を通してみた日韓文化比較」
57	5.10.12 (1993)	オロフ G. リディン （コペンハーゲン大学教授・日文研客員教授） Olof G. LIDIN 「徳川時代思想における荻生徂徠」
58	5.11．9 (1993)	マヤ・ミルシンスキー （スロベニア・リュブリアナ大学助教授・日文研客員助教授） Maja MILČINSKI 「無常観の東西比較」

59	5.12.14 (1993)	ウィリー・ヴァンドゥワラ（ベルギー・ルーヴァン・カトリック大学教授・日文研客員教授） Willy VANDEWALLE 「日本・ベルギー文化交流史 －南蛮美術から洋学まで－」
60	6. 1.18 (1994)	J. マーティン・ホルマン （ミシガン州立大学連合日本センター所長） J. Martin HOLMAN 「自然と偽作 －井上靖文学における『陰謀』－」
61	6. 2. 8 (1994)	マイヤ・ゲラシモワ（ロシア科学アカデミー東洋学研究所研究員） Maya GERASIMOVA 「外から見た日本文化と日本文学 －俳句の可能性を中心に－」
62	6. 3. 8 (1994)	オギュスタン・ベルク （フランス・社会科学高等研究院教授・日文研客員教授） Augustin BERQUE 「和辻哲郎の風土論の現代性」
⑥③	6. 4.12 (1994)	リチャード・トランス（オハイオ州立大学助教授） Richard TORRANCE 「出雲地方に於ける読み書き能力と現代文学、1880～1930」
64	6. 5.10 (1994)	シルバーノ　D. マヒウォ （フィリピン大学アジア・センター準教授） Sylvano D. MAHIWO 「フィリピンにおける日本現状紹介の諸問題」
65	6. 6.14 (1994)	劉　建輝 （中国・南開大学副教授・日文研客員助教授） LIU Jian Hui 「『魔都』体験－文学における日本人と上海」
66	6. 7.12 (1994)	チャールズ　J. クイン （オハイオ州立大学準教授・東北大学客員教授） Charles J. QUINN 「私の日本語発見－王朝文を中心に－」

67	6．9.13 (1994)	フランソワ・マセ (フランス国立東洋言語文化研究所教授・日文研客員教授) Francois MACÉ 「幻の行列－秀吉の葬送儀礼－」
⑥⑧	6.11.15 (1994)	賈　蕙萱 (北京大学助教授・日文研客員助教授) JIA Hui-xuan 「中日比較食文化論－健康的飲食法の研究－」
69	6.12.20 (1994)	彭　飛 (日本学術振興会特別研究員) PENG Fei 「日本語の表現からみた－異文化摩擦のメカニズム－」
⑦⓪	7．1.10 (1995)	ミハイル・ウスペンスキー (エルミタージュ美術館学芸員・日文研客員助教授) Michail V. USPENSKY 「根付－ロシア•エルミタージュ美術館のコレクションを中心に－」
⑦①	7．2.14 (1995)	厳　紹璗 (北京大学教授・日文研客員教授) YAN Shao Dang 「記紀神話における二神創世の形態－東アジア文化とのかかわり－」
⑦②	7．3.14 (1995)	王　家驊 (中国・南開大学教授・日文研客員教授) WANG Jiahua 「渋沢栄一の『論語算盤説』と日本的な資本主義精神」
⑦③	7．4.11 (1995)	アリソン・トキタ (オーストラリア・モナシュ大学助教授・日文研客員助教授) Alison TOKITA 「日本伝統音楽における語り物の系譜－旋律型を中心に－」

⑭	7．5．9 (1995)	リュドミーラ・エルマコーワ (ロシア科学アカデミー東洋学研究所極東文学課長) Lioudmila ERMAKOVA 「和歌の起源－神話と歴史－」
75	7．6．6 (1995)	パトリシア・フィスター (日文研客員助教授) Patricia FISTER 「近世日本の女性画家たち」
76	7．7.25 (1995)	崔　吉城 (広島大学総合科学部教授) CHOI Kil-Sung 「『恨』の日韓比較の一考察」
⑰	7．9.26 (1995)	蘇　徳昌（奈良大学教養部教授） SU Dechang 「日中の敬語表現」
⑱	7.10.17 (1995)	李　均洋 (西北大学副教授・日文研来訪研究員) LI Jun Yang 「－日・中比較文化考－雷神思想の源流と展開」
79	7.11.28 (1995)	ウィリアム・サモニデス (カンザス大学助教授・日文研客員助教授) William SAMONIDES 「豊臣秀吉と高台寺の美術」
⑳	7.12.19 (1995)	タチヤーナ　L．ソコロワ＝デリューシナ （翻訳家・日文研来訪研究員） Tatyana L. SOKOLOVA-DELYUSINA 「俳句の国際性－西欧の俳句についての一考察－」
81	8．1.16 (1996)	ジョン・クラーク (シドニー大学助教授・日文研客員助教授) John CLARK 「日本の近代性とアジア：絵画の場合」

⑫	8．2.13 (1996)	ジェイ・ルービン (ハーバード大学教授・日文研客員教授) Jay RUBIN 「京の雪、能の雪」
83	8．3.12 (1996)	イザベル・シャリエ（神戸大学国際文化学部外国人教師) Isabelle CHARRIER 「日本近代美術史の成立 － 近代批評における新語 －」
⑭	8．4.16 (1996)	リース・モートン (ニューキャッスル大学教授・日文研客員教授) Leith MORTON 「日本近代文芸におけるゴシック風小説」
⑮	8．5.28 (1996)	マーク・コウディ・ポールトン (ヴィクトリア大学助教授・日文研客員助教授) Mark Cody POULTON 「能における『草木成仏』の意味」
⑯	8．6.11 (1996)	フランシスコ・ハビエル・タブレロ (慶應義塾大学訪問講師) Francisco Javier TABLERO 「社会的構築物としての相撲」
87	8．7.30 (1996)	シルヴァン・ギニヤール（大阪学院大学助教授) Silvain GUIGNARD 「筑前琵琶 － 文化を語る楽器」
88	8．9.10 (1996)	ハーバート　E. プルチョウ (カリフォルニア大学ロサンゼルス校教授・日文研客員教授) Herbert E. PLUTSCHOW 「怨霊の領域」
⑲	8.10. 1 (1996)	王　秀文（中国・東北民族学院助教授・日文研客員助教授) WANG Xiu-wen 「シャクシ・女・魂 － 日本におけるシャクシにまつわる民間信仰－」

90	8.11.26 (1996)	王　宝平（中国・杭州大学日本文化研究所副所長・日文研客員助教授） WANG Bao Ping 「明治期に来日した中国人の外交官たちと日本」
⑨1	8.12.17 (1996)	陳　生保（中国・上海外国語大学教授・日文研客員教授） CHEN Shen Bao 「中国語の中の日本語」
⑨2	9. 1.21 (1997)	アレキサンダー　N. メシェリャコフ （ロシア科学アカデミー東洋学研究所教授・日文研来訪研究員） Alexander N. MESHCHERYAKOV 「奈良時代の文化と情報」
93	9. 2.18 (1997)	郭　永喆（韓国・漢陽大学文科大学長・日文研客員教授） KWAK Young-Cheol 「言語から見た日本」
94	9. 3.18 (1997)	マリア・ロドリゲス・デル・アリサル（スペイン・マドリード国立外国語学校助教授・日本学研究所所長） Maria RODRIGUEZ DEL ALISAL 「弁当と日本文化」
⑨5	9. 4.15 (1997)	ミケーレ・マルラ（カリフォルニア大学ロサンゼルス校助教授・日文研客員助教授） Michele F. MARRA 「弱き思惟 － 解釈学の未来を見ながら」
⑨6	9. 5.13 (1997)	デニス・ヒロタ（京都浄土真宗翻訳シリーズ主任翻訳家バークレー仏教研究所準教授） Dennis HIROTA 「日本浄土思想と言葉 － なぜ一遍が和歌を作って、親鸞が作らなかったか」
⑨7	9. 6.10 (1997)	ヤン・シコラ （チェコ・カレル大学助教授・日文研客員助教授） Jan SYKORA 「近世商人の世界－三井高房『町人考見録』を中心に－」

98	9．7．8 (1997)	鶴田　欣也（カナダ・ブリティッシュコロンビア大学教授・日文研客員教授） Kinya TSURUTA 「向こう側の文学－近代からの再生－」
⑨⑨	9．9．9 (1997)	ポーリン・ケント（龍谷大学助教授） Pauline KENT 「『菊と刀』のうら話」
100	9.10.14 (1997)	セオドア・ウィリアム・グーセン （カナダ・ヨーク大学準教授・日文研客員助教授） Theodore William GOOSSEN 「『日本文学』とは何か－21世紀に向かって」
⑩⑪	9.11.11 (1997)	金　禹昌　KIM Uchang （韓国・高麗大学校文科大学教授・日文研客員教授） リヴィア・モネ　Livia MONNET （カナダ・モントリオール大学準教授・日文研来訪研究員） カール・モスク　Carl MOSK （カナダ・ヴィクトリア大学教授・日文研客員教授） ヤン・シコラ　Jan SYKORA （チェコ・カレル大学助教授・日文研客員助教授） 鶴田　欣也　Kinya TSURUTA（カナダ・ブリティッシュコロンビア大学教授・日文研客員教授） パネルディスカッション 「日本および日本人－外からのまなざし」
102	9.12. 9 (1997)	ジョナ・サルズ（龍谷大学助教授） Jonah SALZ 「猿から尼まで－狂言役者の修業」
103	10. 1.13 (1998)	姜　信杓 （韓国・仁済大学校人文社会科学研究所教授・日文研客員教授） KANG Shin-pyo 「京都考見録：韓国文化人類学者の経験」

104	10. 2.10 (1998)	高　文漢 (中国・山東大学教授・日文研客員教授) GAO Wenhan 「中世禅林の異端者－一休宗純とその文学」
105	10. 3. 3 (1998)	シュテファン・カイザー（筑波大学教授） Stefan KAISER 「和魂漢才、和魂洋才－語彙・表記に見る日本文化の特性」
106	10. 4. 7 (1998)	スミエ・ジョーンズ (米国・インディアナ大学教授・日文研客員教授) Sumie A. JONES 「幽霊と妖怪の江戸文学」
107	10. 5.19 (1998)	リヴィア・モネ (カナダ・モントリオール大学準教授・日文研来訪研究員) Livia MONNET 「映画と文学の間に－金井美恵子の小説における映画的身体」
108	10. 6. 9 (1998)	島崎　博 (カナダ・レスブリッジ大学教授・日文研客員教授) Hiroshi SHIMAZAKI 「化粧の文化地理」
109	10. 7.14 (1998)	丘　培培 (米国・バッサー大学助教授・日文研来訪研究員) Peipei QIU 「なぜ荘子の胡蝶は俳諧の世界に飛ぶのか － 詩的イメージとしての典故 －」
110	10. 9. 8 (1998)	ブルーノ・リーネル (スイス・チューリッヒ大学講師・ユング派精神分析家・日文研客員助教授) Bruno RHYNER 「日本の教育がかかえる問題点」

⑪⑪	10.10. 6 (1998)	アハマド・ムハマド・ファトヒ・モスタファ (エジプト・カイロ大学講師・日文研客員助教授) Ahmed M. F. MOSTAFA 「『愛玩』 － 安岡章太郎の『戦後』のはじまり」
⑪⑫	10.11.10 (1998)	アリソン・トキタ (オーストラリア・モナシュ大学助教授・日文研客員助教授) Alison McQUEEN-TOKITA 「『道行き』と日本文化 － 芸能を中心に」
113	10.12. 8 (1998)	グレン・フック (英国・シェフィールド大学教授・東京大学客員教授) Glenn HOOK 「地域主義の台頭と東アジアにおける日本の役割」
⑪⑭	11. 1.12 (1999)	杜　勤 (中国・華東師範大学助教授・華東師範大学外国語学院第2学部副学部長・日文研客員助教授) DU Qin 「『中』のシンボリズムについて－宇宙論からのアプローチ」
115	11. 2. 9 (1999)	シーラ・スミス (米国・ボストン大学助教授・日文研客員助教授) Sheila SMITH 「日本の民主主義－沖縄からの挑戦」
⑪⑥	11. 3.16 (1999)	エドウィン　A.　クランストン (米国・ハーバード大学教授・日文研客員教授) Edwin A. CRANSTON 「うたの色々：翻訳は詩歌の詩化または死化?」
⑪⑦	11. 4.13 (1999)	ウィリアム　J.　タイラー (米国・オハイオ州立大学助教授・日文研客員助教授) William J. TYLER 「石川淳著『黄金傳説』その他の翻訳について」

118	11. 5.11 (1999)	金　知見 （韓国・仏教教育大学大学院長・日文研客員教授） KIM Ji Kyun 「内藤湖南先生の眞蹟－高麗太祖顕陵詩」
119	11. 6. 8 (1999)	マリア・ヴォイヴォディッチ （モンテネグロ共和国政府民営化推進部外資担当課長・日文研客員助教授） Marija VOJVODIC 「言葉いろいろ－日本の言葉に反映された文化の特徴－」
120	11. 7.13 (1999)	リース・幸子　滝 （ケドレン精神衛生センター箱庭療法トレーニングコンサルタント・日文研客員助教授） REECE Sachiko Taki 「心理臨床の場に映った私生活の中の暴力と社会の中の暴力」
121	11. 9. 7 (1999)	宋　敏 （韓国・国民大学校文科大学学長・日文研客員教授） SONG Min 「明治初期における朝鮮修信使の日本見聞」
122	11.10.12 (1999)	ジャン　ノエル　ロベール （フランス・パリ国立高等研究院教授・日文研客員教授） Jean-Noël A. ROBERT 「二十一世紀の漢文-死語の将来-」
123	11.11.16 (1999)	ヴラディスラブ　ニカノロヴィッチ　ゴレグリャード （ロシア科学アカデミー東洋学研究所サンクトペテルブルク支部極東部長・日文研客員教授） Vladislav Nikanorovich GOREGLIAD 「鎖国時代のロシアにおける日本水夫たち」
124	11.12.14 (1999)	楊　暁捷 （カナダ・カルガリー大学準教授・日文研客員助教授） X. Jie YANG 「鬼のいる光景-絵巻『長谷雄草紙』を読む-」

125	12. 1.11 (2000)	エミリア　ガデレワ （日文研中核的研究機関研究員） Emilia GADELEVA 「年末・年始の聖なる夜―西欧と日本の年末・年始の行事の比較的研究―」

○は報告書既刊

なお、報告書はホームページのデーターベースで見ることが出来ます。

****
発 行 日　2000年7月14日
編集発行　国際日本文化研究センター
京都市西京区御陵大枝山町3-2
電話（075）335-2048
ホームページ: http://www.nichibun.ac.jp
問 合 先　国際日本文化研究センター
管理部・研究協力課
****
© 2000　国際日本文化研究センター

■ 日時

1999年 5 月 11 日(火)

午後2時 ～ 4時

■ 場所

国際交流基金　京都支部